

外国人高校生の意見文に見られる作文能力

—主張と根拠の陳述の分析を通して—

三好大 (東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)

1. 研究の目的

高等学校で日本語指導を必要とする生徒の増加に伴い、生徒らの進路を見据えた学力や日本語力の伸張が喫緊の課題となっている。特に、読み・書きの能力は社会参加の上で必要とされている。高校入学後の日本語指導の充実のために、課題を明確化した取り組みが求められる。本研究では、来日数年の生徒が書いた意見文に見られる主張と根拠を、内容と言語に関する知識に着目して分析し、外国人高校生の文章力を高めるための日本語指導のための示唆を得る。

2. 先行研究

作文を書くことは、Scardamaila & Bereiter (1987)によると、内容に関する知識(content knowledge)と言語に関する知識(discourse knowledge)を統合させながら問題解決を行う過程であるという。意見文とは、「ある物事・見解などについての考えを、根拠を明確にして、論理的に述べ表した文章」(田近・井上編著 2009)である。成人の日本語学習者の意見文は、主張への根拠の不明確さや、序論・本論・結論のいずれかの欠落によって、論理性に課題が出る場合がある(植田・今井 2008)。生田(2006)では、外国人生徒の作文の「構成と内容」には、母語と日本語の間に相関があり、母語と共有する知識の転移がみられたという。このことから、母語の確立した生徒は、母語と日本語の知識と相互作用させて作文を書いており、構成と内容にその特徴が現れると言えそうである

3. 研究方法

対象は、特別入学枠のある公立高校の1年生が書いた「外国語が上手になる方法」の意見文15編である。実施した4月での滞日年数はNo. 15が1年、その他は2年以上3年未満である。日本の中学を卒業した者の他、NPOで日本語を学んで入学してきた者もいる。日本語能力は、No. 11がN2に合格している。その他は校内のテストや授業での観察からNo. 7はN2相当、その他はN3相当だと考えられる。実施の際、テーマを口頭および板書で提示した他に教示はせず、辞書使用不可とした。時間は、約30分、手書きで実施した。

分析は、作文の構成は下の①、②で、内容は下の③の観点で分析を行った(結果を表1に示す)。

①文章が序論・本論・結論の三部で構成されているか。(結果は何部構成かの数字で示す。)

②複数挙げられた考え(「上手になる方法」)の関係を表す標識の有無(数)

③「上手になる方法」と理由の対応(数、および理由の根拠)

4. 結果

①の文章構成について、三部構成のものが9編、二部構成のものが5編、本論のみのものが2編あった。二部構成のものはいずれも結論が欠如していた。2級レベルの2名は三部構成であることや、フィリピン出身の生徒に本論のみと二部構成が見られる。

②の複数の考えの接続関係を表す標識の有無に関しては、文章構成に関わらず使用が全く見られないものが本論のみのものを含め7編ある一方で、標識を用いているものには三部構成のものが多くみられる。この観点でも、ほとんどのフィリピンの生徒に使用が見られない。

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
国	フ	フ	フ	フ	フ	フ	中	中	中	中	中	パ	パ	韓	ペ
構成	三	一	二	二	三	一	三	三	三	三	二	二	三	二	三
標識	0	0	0	2	0	0	3	2	3	3	3	3	0	0	3
方法	2	6	1	2	5	7	4	2	3	2	3	3	4	1	4
理由	2	2	1	0	0	0	3	2	1	0	1	3	2	1	3

③に関し、「上手になる方法」の数は、1件から7件と開きがある。但し、理由が一つでも200字以上書いており、文章の長さや方法の数は必ずしも一致しない。また、理由を全く述べていないものが4件、一方で全ての方法に理由を付しているものが2件であった。方法が多いものには、理由が述べられていないものがみられる。「上手になる方法」にはオックスフォード(1990)の認知戦略に該当するような直接学ぶ方法が多数を占めているが、11名が他者との交流や自分の言語学習の管理に関わる方法に言及しており、メタ認知や社会的側面から自身の語学学習を捉えている。理由の根拠には、「知識」・「経験」・「想像・推論等」があった。

下に三部構成で、接続関係を示す標識があり、「上手になる方法」に理由が付されている作文の例としてNo.7を示す。(下線が方法を、網掛けが理由を示す。また傍点は標識である。)

【作文例】 (略) 最初は文法の学習だと思います。(略) 文法ができた後、次は単語の覚えるのことです。文法が分かったら、単語が分からないのは文を作ることができませんので、単語を一生懸命覚えなければなりません。／これらを全部できたら、最後はしゃべることと聞くことです。私は自分の外国語の学ぶ時、よく日本語と英語のドラマなどを見ます。その中で、たくさんしゃべる時使う言葉を学ぶことができるからです。(略)

局所的な文法の誤りはあるものの、接続関係の標識を用いながら言語学習の効果的な進め方を、知識と自分の経験を根拠に述べている。構成が整い、根拠とともに、考えが論理的に示されており、内容の知識と言語の知識を統合して発揮している例だと考えられる。

5. 考察

15名は、第二言語である日本語の作文においても、経験などを根拠に語学学習の方法を表せており、内容に関する知識を活かせる課題設定が重要だといえそうである。しかし、文章構成や接続関係の標識については、日本語の知識に応じた指導が必要である。その上で、フィリピン出身の生徒に課題が見られることから、母語で培った作文の力を把握することが重要だと考えられる。

【引用文献】

Scardamalia, M & Bereiter, C. (1987) "Knowledge telling and knowledge transforming in written composition" *Advances in applied psycholinguistics*, 2 p.p.142-175

生田裕子(2006)「ブラジル人中学生の「書く力」の発達--第1言語と第2言語による作文の観察から」『日本語教育』日本語教育学会 128 p.p.70-79

オックスフォード R. L.・宍戸通庸・伴紀子(1990)『言語学習戦略―外国語教師が知っておかなければならないこと』凡人社

田近洵一・井上尚美編(2013)『国語教育指導用語辞典』教育出版 第4版

槌田和美・今井美登里(2008)「留学生の文章のわかりにくさの原因を探る:アカデミック・ライティングの効果的指導のために」『桜美林言語教育論叢』 4 pp.25-42